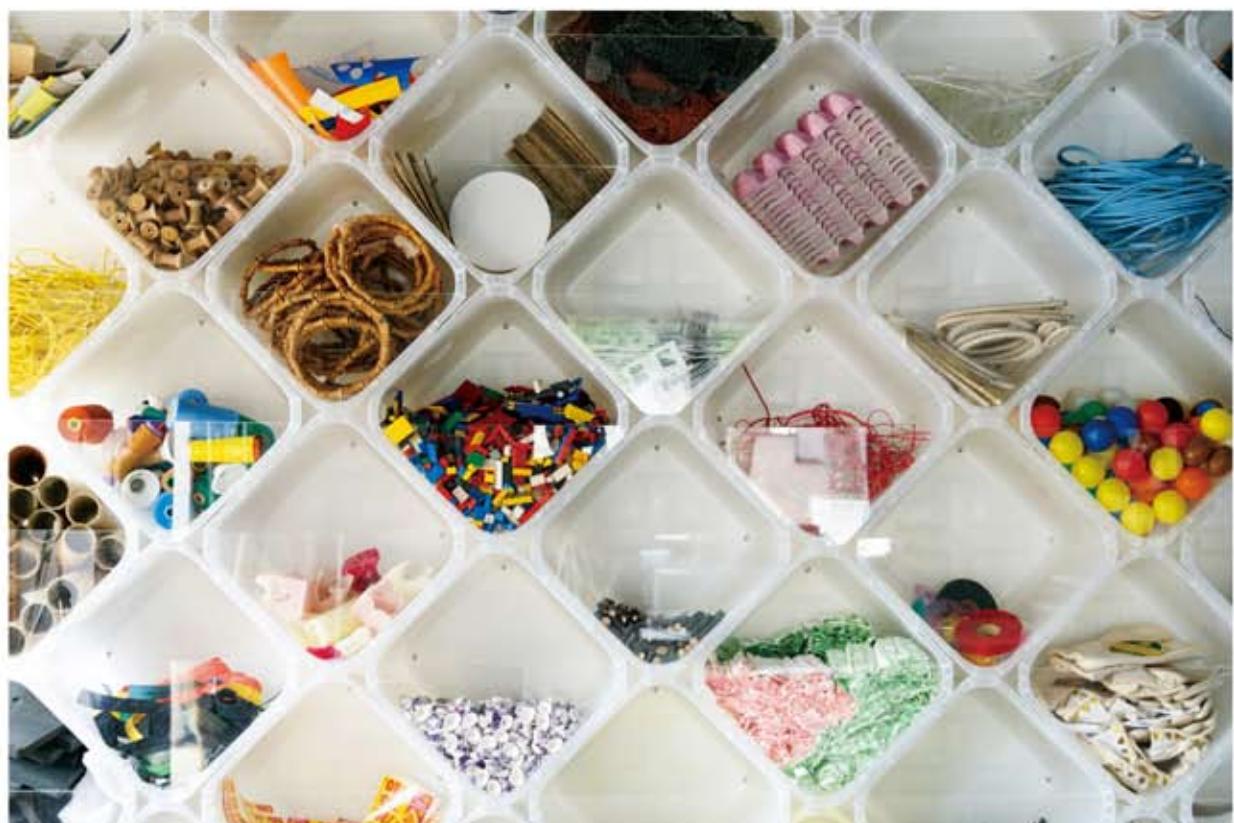


FUEKI

VOL. 61



特集

がんばる若者を応援
藤井裕也さん

がんばる若者を応援

「地域おこし」から「人おこし」へ
あらゆる若者が希望を持つて

暮らせる地域づくりを目指す

NPO法人山村エンタープライズ代表

藤井裕也さん



引きこもりや不登校になっている若者。彼ら

は、学校や社会の中でみんなと交わるのが少
ししんどかったり、苦手なだけ。そんな若者が
山村暮らしをしながら人と関わり、自分を見
つめながら元気を取り戻していく取り組みを
実践しているNPO法人山村エンタープライ
ズ代表の藤井裕也さん。岡山の地から全国へ
「人おこし」の仕組みをひろげていきたい、と
いう思いを財団は応援しています。

「人おこし」で目指しているところは何ですか？

藤井：「若者が生き生きと、希望を持って活動
できる社会」と言っていますが、具体的には、
若者自立支援と地域発展です。活動の始まり
は、2012年。もともとは美作市の山間部で
山村シェアハウスという地域おこし協力隊と
しての事業をやっていて、それが今に発展し
た。不登校とか引きこもりの若者を受け入れ
て、地域の人から頼まれて農作業や川の清掃
活動などのアルバイトやボランティアをやつ
ていた。活動しているうちに彼らもだんだん
と元気になっていくというのが見えたので、
「地域おこし」から若者を元気にする「人おこ
し」でいこうと。

少し困難な境遇にある人が、自立していく
姿を見るのはすごい喜びなので、成長するの
は僕らもうれしい。本人だけでなく親も喜ぶ
というのもあって、地域の人もこれまで住ん
でないところに人が住んで、担い手のないと
ころに担い手ができる、若者が身近にいて元気
になるし、村の使われてない資源も使って、み
んな良かつた。そういう意味で、この活動は教
育とか福祉とかで大きな価値を見い出せるの
ではないかという思いがある。

具体的にはどのような暮らしかですか？

藤井：食べて、働いて、寝る、人間的なシンプ
ル生活が原則。年間を通してするのは農業。田
んぼも借りていますし、果樹づくりもする。草
刈りのアルバイトや古民家の改修や森林、竹



都会よりも田舎の方がいい？

藤井：不便な方が逆に使える資源が多い。無
いから自分で作ったり無いから工夫したり、考え
たり、いろんなことを体験したりする。それがけつ
こう自分の興味や関心につながっていく。

例えば、お年寄りに頼まれて買い物に行くと
すごく感謝されて、高齢者の支援は面白い、や
りがいがあるということになって、今は地域の
ケアセンターで週6日ぐらい働くことになっ
たり、古民家の改築を手伝つたら建築が面白
いから勉強がしたい、というので工務店に
入つたりしている。地域の人も若者と知り合
いになるし、「これは〇〇君にお願いしよう





藤井裕也(フジイヒロヤ)

1986年岡山市北区万成生まれ。岡山一宮高校を卒業し岡山大学へ進学。高校から大学にかけて、「インター キッズ国際塾」と「連塾」にて地域創生と国際社会について学んだ。大学在学中に国際協力団体「たわし」を設立。マガル族が住むネバール国ペソルガ村で学校づくりを行う。東北大震災の年に、地域おこし協力隊として岡山県美作市に拠点を移し、岡山県の北端、過疎高齢化が急速に進む人口約700人の樅並集落で地域づくりに取り組む。2015年移住したメンバーで地域人材の育成と還流・地域課題の解決を目指す組織、NPO法人山村エンターブライズを設立。地域人材の育成プログラムの企画運営・農山村での若者自立支援「人おこし事業」・林野高校での授業「みまさか学」をはじめ全国各地でも地域人材の育成、集落支援や地域経営に資する事業を企画実施している。2016年には岡山県の地域おこし協力隊の代表組織「岡山県地域おこし協力隊ネットワーク会議」を設立し代表を務める。

NPO法人だっぴ副代表理事/地域サポート人アドバイザー /NPO法人山村エンターブライズ代表理事/みんなの集落研究所執行役員/山村bar … /株式会社イング総合計画研究員/岡山県地方総合戦略策定有識者会議委員/勝央町こどもの居場所つくり検討委員会委員/鳥取大学非常勤講師/林野高校非常勤講師(岡山県エキスパート教員枠)/総務省地域おこし協力隊サポートデスク上級専門相談員(9月～予定)

かるという人がけつこういる。そういう人を発掘してしつかりつながつてきたい。

更にもつと言うと、今やつてることをプログラム化して全国に発信したい。ちょっとだけ課題を持つていてる若者と高齢・過疎化という中山間の課題を持つ地域とを「自然・就労・コミュニケーション」を接着剤にしてうまくマッチングさせ、どちらの課題も解決できるようなプログラム。課題と課題を合わせてどちらにもWin(ワイン)を生み出す仕組みを作つて発信していきたいと思つてゐる。



そういう関係を活かしてさらに何かできるかなと思う。

藤井：もちろん。印象に残っているのは家庭内暴力の若者のケース。家はぼこぼこになつているし、お母さんお父さんも疲れ切つていた。僕らの前ではそんな素振りは見せないが、他人の顔色を伺うばかりで人を信用も信頼もしない子だつた。

ここで生活をしていくうちに、高齢者の支援やつて、おばあちゃんからいつも喜ばれて、自分は社会から必要とされてないと言つんだけど、そうじやないというのがだんだんと実感としてわかってきた。そのうち、「目つき変わつたよね」とか、「コミュニケーション」とか、みんなが言うようになつて、友達もできたりして、成長していくのが見えてきた。そこから福祉の方へ進み、最初はインターんとかして頑張つて、就職が決まつたときの嬉しさといつたらまらないかつた。スタッフみんなで喜びました。



「いけ！」から、「藤井、がんばれ!!」まで。はじめは何もわからないまま、トライ＆エラーを繰り返していた。住民にも迷惑をいつぱいかけたし、「ここはもういやだから、帰る！」なんていうのはいくらでもあつたが、周りには応援してくれる人や協力者がたくさんいてくれたので頑張れた。

じやなくて地域に住んでいる人全体で、そういう若い人を受け入れる素地を作りたい。シェアハウスでは女性の受け入れが難しいので、だれでも受け入れられる民泊の事業を始めた。実際そういうところは全国にも無い。地域のおばあちゃん家とか、同世代の若者がいるところに泊めてもらつて家族として、村人として活動する。そうすることで、引きこもりや不登校になつてゐる若者に対する壁とか偏見みたいなものを取り払うことができると思つてゐる。実際、民泊への理解者はいる。自分の親戚の息子とかが引きこもつていて、わ



幅広い取り組みに光を当てる
地道な活動、

谷口澄夫教育賞受賞者を発表

福武哲彦教育賞、 谷口澄夫教育奨励賞を発表



平成28年度
谷口澄夫教育奨励賞
谷口澄夫教育奨励賞の表彰式が、
7月23日に行われた。
今回で30回目となる
福武哲彦教育賞には、
学校法人おかやま希望学園が、
16回目を数える教育奨励賞には、
岡山県NIE推進協議会、
岡山市立石井小学校、
NPO法人だっぴの
3団体が選ばれた。



黒瀬堅志理事長

既存の学校になじみにくい子どもたちのために平成7年に設立された、全国でも珍しい小中併設の全寮制の学校で、県内外問わず多くの子どもたちを受け入れている。学園では、「生きる力」「知・徳・体のバランスのとれた個性、社会性豊かな子ども」の育成に取り組んでいる。20年以上にわたるきめ細やかな自立(自律)を促す指導により、多くの子どもたちを高等学校へ送り出してきた実績が高く評価された。

トラブルを
チャンスに

大きな賞をいただけ、たいへん名誉なことだと思っています。
全寮制ですから、24時間365日、思ひがけないことが起こります。職員の苦労は生半可ではありません。でも、トラブルこそがチャンスだと思っております。教師と子どもたちが一緒になって、

して県内外から高い注目を集めている。

オリジナルの取り組みで成果……

当校では、3年間のモデル校の後、4年目から特色ある教育として独自に取り組みを進め、今年で12年になります。現在は国工科イメージョン学習(1～4年)、外国語活動(1～6年)、短時間学習(ENGLISH TIME)、朝の英語放送、英語で遊びを楽しむ時間)を中心に行っています。今回、石井小オリジナルのイメージョン教育で、外国人講師と一緒にを経験してきました。これまで積み重ねてきたプログラムを評価され、たいへんうれしく思っています。

子どもたちをみていると、たんに英語力だけでなく、コミュニケーション力や人とかかわる力が身につき、国際人としての意識の高まりを感じます。異文化交流、国際交流を通して、自分たちが学んだ英語を生かして思いを発進する楽しさやすばらしさを味わっているからでしょう。

今後も、自然に英語を使いたくなる環境の充実を図り、これからグローバル化時代を担う人たちに必要な資質・能力を身につけられるよう、地域の人たちや保護者の方たちと共に努力していきます。

話し合い、解決していくようにしているんです。

全校議会というのを開いて、できるだけ子どもたちのことは、子どもたちの力で決めていくんです。それが学園の特色です。もちろん保護者の方とも密に連携を取りながらやっています。

一口に不登校といつても、この学園がスタートした21年前と今とでは、ずいぶん様子は変わっています。子どもも保護者も、でも、私たち職員のやることは、変わらない。起つてくるそれぞれのケースに応じて対応していく、そういうやり方は変わっていません。

それでも、楽しいことはうが多いであります。県内外からいろんな方が学園を見に来られる。すると、元気いっぱいあいさつする子どもにびっくり。子どもたちの姿に驚かれます。

そして、毎年の卒業式では感動します。学校に行けなかつた子どもが、義務教育を終了し、やつとたどり着いたその喜びを親子でかみしめ合うんです。親も子どもも、もう涙、涙。その姿を下級生の子どもたちが見て、自分たちもがんばつて続けて行こうという気持ちになるんです。



● 岡山市立石井小学校
谷口澄夫教育奨励賞



後閑智美校長

谷口澄夫教育奨励賞

● 岡山県NIE推進協議会

1930年代にアメリカで始まつた新聞を学校の教材に活用しようという活動が、1980年代に日本でも取り入れられるようになつた。岡山県NIE推進協議会がスタートしたのは、平成11年。実践指定校に新聞を提供し、公開研究会、報告会、NIEセミナーなどを開いてきた。平成19年には、第12回NIE全国大会を岡山市で開催した実績をもつ。

レベルに応じたプログラムを……

語彙力を高めるだけでなく、集中力を養い、ちょっと立ち止まって考える時間を持つ、紙の新聞だからこそできることをこれからも教育新聞だからこそできるのを考えて、取り組むのが協議会の役目です。地道な活動、継続的な教育への貢献を認めていただいたということで、賞をいただいてうれしいです。



加賀勝会長

現場の人と新聞関係者が一緒になつて考えていきたいと思います。

子どもから青少年までを対象に、そのレベルに応じて新聞が教育の現場でどのような貢献ができるかというのを考え、取り組むのが協議会の役目です。地道な活動、継続的な教育への貢献を認めていただいたということでお祝いをいただいてうれしいです。

けられました。
始めて6年
目に最初は若い
人と地域の魅力
的な大人がつな
がる場所がない
なあと。

だつびのプロ
グラムは、オリジ
ナルで考え、試行
錯誤しながら進
化させてきたもの
です。根本には、楽しいことを
やりたいなとい
う思いと、自分自身にこういう機会があつた
めちやめちやうれしい。教育の専門家でもな
い自分たちが、教育の分野の人たちに認めてもら
って、賞までいただけるなんて、たいへん光
景ですし勇気づけられました。

だつびのプロ
グラムは、オリジ
ナルで考え、試行
錯誤しながら進
化させてきたもの
です。根本には、楽しいことを
やりたいなとい
う思いと、自分自身にこういう機会があつた
めちやめちやうれしい。教育の専門家でもな
い自分たちが、教育の分野の人たちに認めてもら
って、賞までいただけるなんて、たいへん光
景ですし勇気づけられました。

谷口澄夫教育奨励賞

● NPO法人だつび

将来に不安を抱える中高生や大学生などの若者が、岡山で活躍する「おとな」たちと、生き方や働き方について本音で語り合える場を提供している「だつび」。平成21年に活動を始め、第1回の「だつび50×50」を開催。平成25年にはNPO法人化し、協働事業として岡山県備前県民局と「高校生だつび」を開催(平成26年)、岡山市教育委員会と「中学生だつび」をスタート(平成28年)。岡山市、美作市の中学生と「中学生だつび」(平成27年)を開催し、若者の社会参画を応援する仕組みとして高い関心が寄せられている。

社会教育として定着を……

めちやめちやうれしい。教育の専門家でもない自分たちが、教育の分野の人たちに認めてもらつて、賞までいただけるなんて、たいへん光景ですし勇気づけられました。そのためにも、ぼくたちはちゃんと続けなければと考えています。そして、真似してもらうためにも、今後は今まで以上に周囲と協力し、多くの方のかかわりの思つてはいません。ぼくらは見本市になろうと思つてはいません。ぼくらを真似して、いろんなところでやつてほしい。そのためにも、ぼくたちはちゃんと続けなければと考えています。それもとで作つて行きたいと思つています。



NPO法人だつび
柏原拓史代表理事(左から2人目)

贈賞式後に行われた教育活動助成発表会で助成対象者のみなさんからお話しをうかがいました。



● 本庄地区社会福祉協議会

武久源男さん・出井邦昭さん

3歳以上小学3年生までの地域の子どもたちとその親のための「寺子屋」を運営。グローバル社会に対応しようと英会話学力向上のための算数、そして食農教育の3点セットで活動しています。教員経験の人たちなど地域のいろんな人たちにボランティアで協力してもらつていて。地域住民の交流も図ることができ、喜ばれています。助成金を活用して、より活動の幅を広げ、充実させていきたい。



● 特定非営利活動法人宇野港芸術映画座

上杉幸三マックスさん

宇野港芸術映画座の活動の一環で、キッズ部門「ユーズプログラム」と「こども映画座」を企画。いろんな学生のつくった映画を見て、一緒に考えようというプログラムです。これまで文化助成を受けていたのですが、教育分野での助成は初めて。子どもにリーチしにくい面があつたので、少しずつ理解を広げてきました。やるからには刺激になるものにしたいと思っています。

ぬくだまインターナショナル
プロジェクト

齋野和博さん

昨年、神奈川から移住してきたミュージシャンです。縁があつて、北木島にいます。9月17日か





「国吉康雄展」を終えて

6月3日～7月10日の約1か月間にわたって、

そこう横浜店の6階にある美術館で「国吉康雄展」が開催された。

国吉作品では世界最大の福武コレクションを中心に絵画・資料あわせて約120点を展示。

サブタイトルは「少女よ、お前の命のために走れ」。どのような展覧会だったのか、

そこう美術館学芸員大塚保子氏とキュレーションに携わった

岡山大学国吉康雄寄付講座准教授才士真司氏に寄稿していただきました。



わたしは生まれたとき、最初に聞いたのは、「走れ」という言葉だった。
わたしに走れと言ったのは、国吉康雄、やすお国吉、Yasuo Kuniyoshi。
わたしを描いた画家さん。
わたしのいる世界を描いた画家。
岡山で生まれて、横浜から船に乗って、アメリカを目指し、ニューヨークで死んだ。
たくさんのアメリカ人の友だちがいて、アメリカにとても愛された人。アメリカを愛した人。アメリカに「お前は敵国人だ」と言われたりもしてたけど。
そして、わたしを走らせる人。

道はわたしの先に続いている。
まっすぐに。
空は晴い。
わたしの後ろに、何かが追る。
けれどわたしは振り返らない。
わたしは、わたしの命のために、走らなければならないと、描者が言ったから。



一般財団法人そこう美術館
学芸員 大塚保子

「新しい生命がふきこまれ、胸に響く展示で
「知ること、展示すること、考えさせる良い展示」
など今回の展示構成はひときわ反響が大き
く驚きました。

国吉康雄展はそこう美術館が昨年30周年
を迎えた年に横浜から発信するコンセプト
の第一弾。アメリカでは評価が高い画家であ
り、松本隆理事長(そこう西武社長)と野口英
治副館長の長年の夢でもあった国吉展が実
現しました。

世界最大の国吉コレクションを持つ福武
財団と才士真司准教授に、横浜から発信す
る、若い人に向けたメッセージ性の高い展覧
会にしたいとの希望を伝えると「少女よ、お
前の命のために走れ」というインパクトの強
い興味深い企画が提案されました。

戦前戦中戦後の困難な時代をアメリカで
過ごした国吉の軌跡は、作品から発せられる
強いパワーが何よりも心に響きます。オープ
ニングのトークイベントでも千住博氏は國
吉のことを語りながら自身が体験している
異国で活動する困難さをとても熱く語り、
クールな千住博像を見事に打ち砕き印象を
一変させられ驚きました。

また、クラウンが修復後、日本で初公開さ
れことにより日曜美術館アートシーンや日
本経済新聞・朝日新聞の文化面で大きく紹
介いただきました。展覧会に対する評価もと
りわけ高くご協力いただきました多くの皆
様に感謝の気持ちでいっぱいです。

岡山大学国吉康雄寄付講座
准教授 才士真司



この「クラウン」の絵は、1948年に西海岸
の日系人のためのチャリティーイベント
で描かれた絵なんだって



横浜国立大学のアートツール・キャラバンの
ワークショップに参加したよ

★岡山県立美術館 特別展
「国吉康雄—日本とアメリカ
岡山のコレクションから」
9月23日(金)～11月6日(日)
本展では館蔵品や福武コレクションなど岡山県内の所蔵品
をもとに、国吉の作品を鑑賞する面白さを伝えます。

★国吉祭2016
会期 10月8日(土)～23日(日)
日系アメリカ人アーティスト研究シンポジウム
10月9日(日) 13:00～18:30
岡山大学 Junko Fukutake Hall
登壇者 千住博(日本画家・ニューヨーク在住)他
国吉康雄体感型展示イベント
「少女よ、お前の命のために走れ」
ルネスホール
10月21日(金) オープニングイベント 18:00～
10月22日(土)・23日(日) 11:00～
出石町界隈での国吉康雄関連展示とイベント
10月8日(土)～23日(日)
詳細はホームページを
<http://www.yasuo-kuniyoshi-pj.com>



「若い人に向けたメッセージ性の高い展覧
会」というそこう美術館の希望に応えるに
は、どうすればいいのか。物語をひとつ提示
することにした。コンセプトは、自分の記憶
や経験をどう絵と対峙させるか。その仕掛け
として「少女」を登場させた。年端もいかない
少女が、どうやらカマキリに追われているら
しい、サブタイトルは「少女よ、お前の命のた
めに走れ」。鑑賞者が少女と一緒に国吉の生
きた時代を作品や言葉を通して一緒に旅が
できる。そしてなぜ少女が走らなければい
けなかつたのか、自分ではない誰かのために
絵を見る行為を考えるという行為をしてもら
うことによって、絵とより近づきやすくなる
だろうと思った。そして何よりこの絵は、い
ろんな会話が生まれる引き出しがたくさん
ある絵だったから。

ようびの食卓

大島奈緒子・文

ようびの食卓は、当番制。毎日の昼食は、みんなで食べる。夜も時々。誕生日は必ず。

はじめは2人でスタートした食卓も、気がつけば8人の大所帯になつた。



毎年、秋になると、村の農家さんに一年分のお米を頼む。去年は400キロ。なにせ、食べ盛りばかりの、大家族だから大変だ。食事を共にするようになったきっかけは大したことない。起業当時の西粟倉には、ごはんが食べられるところが少なく、単身者はコンビニが頼りだったからだ。それでは、体に力も入らないし、いいものも作れない。テーブル、つまり食卓を作る者が、ちゃんと器を選び、使うことを意識することとはとても大切なこと。また、山菜が並んだり、お野菜を頂いたり、季節を感じられるのも大切に思っている。

特に、新しくメンバーが入ってくるときは大騒ぎだ。誰しも、はじめての「ようびめし」があるわけだが、みんな何かしらの伝説を残している。例えば、料理上手の山口は、パスタを作った。大皿の真ん中に、くるりと高くキレイに盛り付けたものだから、「カフェエか！」と未だに言われている。私たちは、大皿に山盛りのパスタを箸で、ガシガシ食べる。紅の豚のミートソースみたいに。そういえば、新人の職人、19歳女子の杏実は、実家の料理をしたことがなかったという。最初は、トン・トン…トンと

優雅なリズムだったが、最近ではトンントンと小気味よい音がするようになつた。不思議と料理が時間内にうまく作れる頃には、仕事の段取りも良くなつていて。一緒に、食卓を開むと、それぞれの体調や調子がなんとなくわかる。チームの様子も然り。次第と、それぞれの好みや、お国柄、定番メニューなどが知れるのもいい。

「抵張家内制手工業」を掲げる「ようび」にとって、もっとも大事にしているのが、この食卓だ。ご飯の時間には必ず、顔を揃える。いい時も、悪い時も。

どうしても忘れられない食卓がある。火災の後の朝、憔悴しきった私たちに、「食べなさい」と地元のお母さんが用意してくれました。おにぎりと、お味噌汁。食べられないうと思った。普段は、強く言うことのないお母さんが、何度も、食べなさい、とおっしゃった。あの時、みんなでちゃんと飲み込んだから、その後、立ち上がりれたのだと思っている。

思えば、私たちを助けてくれたのも、不思議とようびの食卓に遊びに来てくださつたことのある方が多かつたようだ。今日は、私たちは食卓を開む。私たちは家具を作ることで、美しい森の風景と、たくさんの食卓の風景を作りたいから。今は、招ける食卓がない。今の私たちの夢は、もう一度、大切な人と囲める「森の食卓」をつくること。そのために、今日も、よく食べ、よく働き、よく笑う。それが、ようびだ。

「夜8時からは母の時間」



実家の酒屋の前で母と子どもたちと(昭和56年)

長女が2歳のときに勝山に帰つてきました。長男と次女は勝山生まれになります。実家は酒屋だったのでとても忙しく、祖母と母に助けられて3人の子どもを育てました。祖母はとても厳しく高熱があつても学校を休ませないタイプ。一方母はのほんとした典型的なお嬢様タイプでした。

子どもたちに対して、あまり叱つたことはありませんが、「あいさつをすること」と「人に迷惑をかけないこと」は厳しくしつけました。お客様にあいさつをしなかつたら、お店に入るところからやり直しをさせました。お客様がいて我が家は成り立つていたるのだからと、商売としての礼儀について何度も説明しました。おかげさまで、町内の中で一番あいさつができる家族と言われてました。

子どもたちが寝るのは8時と決めていました。それまでにお布団に連れて行って、絵本を読めるだけ読みました。8時になると「さあ寝ましょ。これからは私の時間です」と部屋を出て、11時まで機織りをしました。とにかく、何があつても8時にはお布団に入つてもらいました。子どもたちも高学年になると8時には寝なくなりましたが「それでも失礼いたします」と8時には部屋を出て、毎日毎日機織りをしました。今でも子どもたちには「とにかく寝かされたよな」とよく言われます。

お母は酒屋の手伝いで配達をして、夕食を作つて片付けて、子どもを寝かしつけて、どんなに疲れていても8時から11時までは機織りをするというのが私の一日でした。その姿を見ていた子どもたちも「勝てないな」と思つたのでしようか、母親のやりたいことを認めてくれていたのだと思います。

子どもたちが保育園に行くまでは、機織り機は組み立てることはしないで、子どもが触つても怒らないですむ糸紡ぎの作業をしていました。できる一とを少しずつやつていきました。自分の手から機織りが離れたことはありませんでした。

50歳のときに、ひのき草木染織工房を始めました。同じ頃のれんの話をいたしました。子どもたちは「お母さんは引きが強い」と言いますが、自分がやりたいと言っています。自分は何が好きなのか、何が好きなのか、自分の感性に触れるものを常に考えておきたい、そうすると、いつか見つかるからと。あと、勉強は何才になつてもできるからと言っています。(談)

加納容子
NPO勝山・町並み委員会理事、
草木染織作家

1947年真庭市勝山生まれ。女子美術短期大学デザイン科、生活美術科卒業後、29歳で勝山にUターン。1996年に勝山町並み保存地区にて、のれん制作開始。翌年、生家にて「ひのき草木染織工房&ギャラリー」を立ち上げる。

「のれんによるまちづくり」で2008年NPO勝山・町並み委員会が福武文化賞を受賞。

こそだて、おやそだて

瀬戸芸、秋会期は、犬島へ行こう！

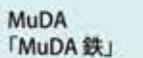
瀬戸内国際芸術祭2016

秋—2016年
10月8日[土]—11月6日[日]

30日間



内橋和久
「犬島サウンドプロジェクト Inuto Imago」



MuDA
「MuDA 鉄」



Nibroll
「世界は縮んでしまってある事実だけが残る」

夏会期、犬島では、激しく身体を衝突させるMuDAの新作野外作品、発電所跡を舞台にしたNibrollの公演、劇団維新派の舞台音楽を20年以上監督している内橋和久さんによるサウンドプロジェクトの3つのパフォーミングアーツプログラムが行われました。秋会期にも2つの公演が予定されています。そのほか、犬島「家プロジェクト」I邸ではオラファー・エリーソンの作品が、また岡山市立犬島自然の家近くでは「犬島くらしの植物園」が公開されます。犬島精錬所美術館も含め、ここでしかできない体験をお楽しみください。



10月8日(土)～11日(火) 「円都空間 in 犬島」 produced by 小林武史
10月15日(土) ダミアン・ジャレ | 名和晃平 「VESSEL」

FACE

UNOICHI実行委員会

渡辺 樹 (岡山県立玉野高校3年)

「得意不得意をみんなでカバーできるイベント」

校長先生から声をかけられて、なんとなく手伝いはじめたUNOICHI。今では「第2の家」に……。

「生まれて育った直島が大好きです」と日焼けした笑顔の渡辺樹さん。現在も直島で両親と弟と暮らし、毎日フェリーに乗って玉野高校に通っている。学校では生徒会長の仕事をこなし、バトン部に所属、直島では太鼓を習い、UNOICHI実行委員会にも参加する多忙な学生生活を過ごしている。

校長先生から「高校生と大学生と大人が一緒にやってるマジックがあるよ。やつてみないか」と声を掛けられたのがきっかけでミーティングに参加することになった。もともとボランティアが好きだったこともあり、何度かミーティングに参加した。UNOICHI主催の「海のみえるマルシェ」に遊びに行つたとき、港の風景とゆつたりとした雰囲気に、やってみたい

と思いつた。UNOICHI高校生のメンバーは、玉野高校、玉野商業高校、玉野光南高校の有志の生徒たち。自らが企画し運営していく。懐かしの駄菓子、足湯、お茶の振る舞い(和)をテーマにした企画、地元企業のトンボ学生服に提供してもらつた生地で作ったフラッグ、UNOICHI公式コードおにぎり「玉結び」など高校生らしいアイディアで来場者をもてなす。テントの設営や駐車場の誘導、会場でのアンケートなど裏方の仕事にも携わっている。渡辺さんは、3校が集まるミーティングが一番好きだという。「他校生との会話は、校風が微妙に違っていたりして面白いし、みんなそれぞれ考え方が違うし、価値観が違う意見も刺激になります。UNOICHIに入つていなかつたら経験できなかつことかなと思います」

将来の夢は「旅館の仲居さん」。小学校の修学旅行で泊まった旅館の若女将のおもてなしが忘れられない思い出となっている。自分と同じような経験を味わってほしいと決心し、卒業後はサービス関係の専門学校に進学するため岡山を出ることになった。高校卒業と同時にUNOICHIを卒業することになるので、自分たちがいなくなつてもでききるように後輩たちの育成をしていく。「基本的なことですけど、きちんと連絡をすること。それができないと困る」と、仲間もたくさんできだし、私にとって第2の家のようないい感じです」再び、宇野港で渡辺さんの笑顔に会える日を楽しみに待っていたい。

UNOICHI実行委員会

日常がちょっと楽しくをテーマに、宇野港を会場としたマルシェや音楽などを楽しむイベント「UNOICHI」を開催。企画・運営を高校生と大学生が大人と一緒に行っている。8月21日には高校生たちが企画・運営した特別企画「Summer style ~ Teens small step ~」が特別開催された。

<http://unoichi-tamano.com/>

<https://www.facebook.com/unoichi.tamano/>

Cover Photograph



田中園子

Tanaka Sonoko

写真家/1975年東京都生まれ、岡山市在住。関西学院大学社会学部卒業。2016/「SUMMER 2016」(gallery A-zone)、2014/「PHOTO」(gallery A-zone)、APAアワード2013写真作品部門入選、「NTMY ISSUE.2 EXHIBITION」(青森県十和田市現代美術館 Towada Art Center)、2012/岡山県美術展覧会写真部門奨励賞、2010/写真集「3DK」刊行

表紙写真: IDEA R LAB
<http://www.idea-r-lab.jp/>

ひかり

田中園子

肌に突き刺すような真夏の日差しの下、玉島へ行く。左右に広がる家々を抜け、ラボに続く緩やかなカーブの道は、むかし海岸線だったとか。なるほど町並みが微かに塩の香りを漂わす。

IDEA R LAB(イデアアールラボ)はクーラーをかけず、窓を開けていた。風が抜けるので8月だというのに涼しい。卓球台をリユースした大きなテーブルで、手作りの「桃とヨーグルトのスムージー」をいただきながら、リユースされた色も形も様々な椅子に座り、皆が穏やかに談笑する。いつもより時の流れがゆっくりと感じられる。

「ではご案内しますね」と大月ヒロコさんが立ち上がる。そこは不思議な世界だった。不要とされたモノが形や用途をかえて生まれ変わり、新しいモノとして存在している。ゴム印が照明になり、卵ケースがベンダントライトになり、ソファーのスプリングが雑誌ラックになっていた。面白いことに、どれも前からその形だったかのようだ。言わなければ廃材とはわからない。「廃材とはなんだろう」とふと思う。細かく分類された廃材たちは、色とりどりでとても綺麗だった。

同じもの、見方ひとつ、アイディアひとつで変わるものだ。写真も同じだ。見慣れて素通りする光景も、意識や視点をかえれば何かが見えてくる。目の前に全てはあるのだ。人が見落としているところに光をあてる。光に包まれた廃材たちに囲まれながら、シャツタを押した。

Editor's Column

■広報誌「FUEKI」(不易)は、昨号より体裁を大幅に変更し、読みやすくなったと概ね好評の声をいただきました。更に今号をご覧になった皆様からの生の声を知らせていただければ有難いです。当財団主催のフォーラムや式典でも、交流会を設けて、自然な形で生の声をうかがう機会を設けています。定期配布の広報誌ですが、より近い存在にしてゆきたいと思います。■「革新は辺境から生まれる」という経営学の言葉から、「辺境の覚悟」という言葉が浮かびました。金もない、人もいない、モノもない辺境の地だが、それだからこそ、新しい革新的な価値を創造することが出来る。辺境のど真ん中にいるという自覚を持ち、無いものを嘆くではなく、在るものを活かして、目指すべきことをやり抜こうという覚悟を持つことが大切だという意味です。「覚悟」というと悲壮感を感じさせるのか、当財団女性スタッフから評判が悪いが、今回取材した藤井裕也さん(NPO法人山村エンタープライズ代表)の話は、もっと明るく前向きで、自然体で実践されています。秘めたる覚悟はあるはずだがと考えてしまうのは、昭和世代の染み付いた思考回路のせいでしょうか。(O)



公益財團法人
FUKUTAKE
EDUCATION AND CULTURE
FOUNDATION

人づくり、地域づくりを応援します

福武教育文化振興財団

〒700-0807 岡山県岡山市北区南方3-7-17
株式会社ベネッセコーポレーション本社3階
TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190
URL:<http://www.fukutake.or.jp/ec/>
E-MAIL:eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.61 2016.9.25

編集・発行:

公益財團法人福武教育文化振興財团

制作: 株式会社吉備人

デザイン・イラスト: タケシマレイコ

印刷: 株式会社三門印刷所